

第二回 市長対談

写真家 松原豊氏



5月23日、美里町三郷に移住し写真家として活動する松原豊さんを前葉泰幸市長が訪ね、写真家としての活動や地域での暮らしについてお話をお伺いしました。

松原豊氏プロフィール 津市美里町三郷在住。1967年津市生まれ。専門学校名古屋ビジュアルアーツ写真学科卒業後、撮影アシスタントなどを経て独立。三重県内を中心に活動する傍ら、村を記憶する写真師としての撮影をライフワークとする。(社)日本写真家協会会員。

村の景色に憧れて

市長 美里には、昔からずっとお住まいなんですか。

松原 いいえ。移住したんです。

市長 美里を気に入られた理由は。

松原 移住先としていくつか候補があったんですが、古い家と周りの景観が気に入り、ここにしました。



café Hibicoreの囲炉裏端で写真集について語る松原さんと前葉市長

市長 家の中には^{いろり}囲炉裏などもあって、とても素敵なところですね。

震災半年後に被災地へ

市長 松原さんが、東日本大震災の被災地で撮影した写真が「生きる 東日本大震災から1年」(新潮社刊)という写真集に掲載されていると伺いましたが。

松原 この写真集には、日本写真家協会の写真家たちが撮影した写真を中心に掲載されているのですが、私が震災から半年後の昨年夏に岩手県大槌町を訪れた際、避難所となっていた体育館がちょうど閉じられようとしているときの風景

を写したのも入っています。
市長 避難所が閉じられる時ということは、最後のお一人しか残っておられなかったとか。

松原 そうなんです。たまたまその方と前日お会いして、避難所である体育館を翌日に出られると聞き、ぜひ写真を撮らせて欲しいという話になったんです。

市長 被災地の写真を見ますと、大きな災害だったんだとあらためて実感します。そういう中で最後の避難者となったこの方だけが写る写真を見ると、以前この場所には、多くの皆さんが避難していたんだということが目に浮かぶ、そんな写真ですね。

松原 体育館の中は、物とかもきれいに片付けられているんですが、壁には「頑張れ大槌」など、たくさん寄せ書きが書かれ、人々の生活が感じられる場所でした。

市長 私も昨年6月に被災地の宮城県を訪問し、実際に河口の堤防が損壊している現場を見てきました。

私たちが暮らす津市にも南北20キロ続く海岸があります。この海岸にある堤防がどんな地震でも絶対に大丈夫かと言われると必ずしもそうとは言えません。実際に現地を見て、想像力を逞しくして災害に備えなければいけないと実感しました。

松原 そうですね。自然は美しいですが、逆にものすごい力を持っているんだと感じました。



復興へと進むこれからの被災地の姿も写真に収めていきたいと語る松原さん